

[様式14]

(対象事業：1. 子どもを対象とした事業およびその開発にかかる事業

2. ミュージアムを核とした地域文化資源の整備・活用に関わる事業

3. ミュージアムを核とした地域の人材・組織の育成・連携・活用に関わる事業)

事業名：博物館を核とした学校・地域  
交流プログラムの開発事業

事業者名： 東北歴史博物館

連携事業館名：多賀城市立城南小学校

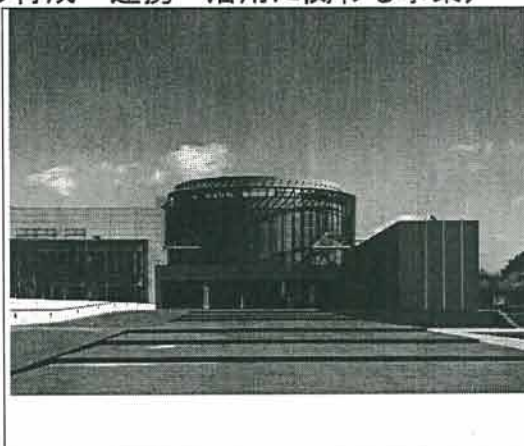
東北学院大学ほか

住所：宮城県多賀城市高崎1-22-1

TEL： 022-368-0101

FAX： 022-368-0109

HPアドレス：<http://www.thm.pref.miyagi.jp>



#### ①施設概要

東北地方の歴史、文化を紹介する目的に、平成11年に発足した宮城県立の歴史系博物館である。

#### ②事業の意図目的

博物館運営において博学連携事業の重要性が増してきている近年、本館でもこうした状況に対応するために様々なプログラム開発を進めている。本事業では、複数の小学校による交流会を軸に、博物館を核とした小学校、大学、地域の諸団体による連携事業を行い、今後のプログラム開発に資することを目的とする。

#### ③事業概要

本事業では以下のプログラムを実施した。

##### 1. 小学校交流会

博物館において宮城県内の小学校3校による学習発表および体験活動を実施する。

##### 2. 畑作体験

博物館に隣接する小学校と共同し、館の畑を使った大豆の栽培、収穫、加工体験を行う。その成果は小学校交流会にて発表する。

##### 3. 大学連携事業

大学との共同民俗調査の報告書を刊行し、調査地での報告会を行う。また、畑作体験における体験補助を通して、調査データの社会還元をはかる。

#### ④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他 ( )  
作成した報告書等

ビデオ ( )

冊子 (「博学連携事業化報告書」「波伝谷の民俗」)

その他 ( )

#### ⑤参加者状況

参加者人数 延べ 510人

内 訳 小学生 290人 大学生 36名 大人 184名

### (1) 事業の実施状況について

当館では、学校・地域交流プログラムとして、次の事業を実施した。

#### 小学校交流会

小学校交流会は、宮城県内の3つの小学校の児童が参加して行われた。参加校は県南部の白石市立深谷小学校の3、4年生、県央部の多賀城市立城南小学校の4年生、県北部の南三陸町立戸倉小学校の4年生である。11月9日に開催した交流会では、児童による農作業体験の学習成果の発表、各校で用意した体験プログラムによる交流及び当館の展示の見学を行った。発表は、深谷小学校が稲作体験、城南小学校が畑作体験、戸倉小学校が養蚕体験についてそれぞれ行い、体験プログラムも石臼を使ったキナコ作りや、繭マスコット作りなど、発表に関連した内容を各校用意し、自由参加方式で実施した。

当日のスケジュールは以下の通りである。

10:20～ 開会行事

10:30～ 各校の研究発表

11:40～ 体験教室

プログラム：農作業体験

キナコ作り体験

染色体験

繭マスコット作り体験

繭掻き体験

12:40～ 昼食・休憩

13:30～ 特別展見学ほか

14:20～ 閉会行事



写真1 学習発表のようす（深谷小学校）



写真2 体験教室のようす（石臼体験）

当日は、これらの体験活動の補助として、各校で体験学習を指導している地元の人や父兄にも事業に参加していただいた。また、東北歴史博物館ボランティアの会の有志や



東北学院大学の学生も交流会全体の運営補助を務めるとともに、体験の補助にも入った。

このように、児童同士の交流のみならず、様々な世代の人たちとの交流が図られるように企画したものである。

また、交流会終了後、11月25日に「小学校交流会事業化検討会」として、参加各校教員および、博物館職員による意見交換を行い、今年度の交流会の成果のみならず、問題点や今後の事業化に向けてのスケジュールなどを検討した。この会は県内全小学校に案内を出し、教員向けに公開する形態で開催した。

### 畑作体験

畑作体験は、博物館に隣接する多賀城市立城南小学校4年4組の児童とともに、博物館の屋外展示「今野家住宅」の庭にある体験用の畑および城南小学校の学習用畑を使っ  
ての栽培体験を行った。栽培面積は2アール弱で、栽培作物は大豆である。大豆の種の  
調達や栽培法の指導については、宮城県古川農業試験場の協力を得た。

作業は今野家住宅の解説ボランティア団体である東北歴史博物館ボランティアの会の  
協力を得て、事業を進めた。体験作業は、畑の土作りから播種、土寄せ、枝豆の収穫、  
枝豆の加工、大豆の収穫、脱穀、加工の各工程で行った。作業に際しては道具をなるべく  
く手作業による農作業の体験と位置づけ、鍬や鎌、穀打ち台などを用いた。

体験事業は以下のスケジュールで行った。なお、種まきについては本事業対象外の事  
業として実施した。

6月20日	種まき
7月19日	間引きと土寄せ
9月25日	収穫祭（ずんだ団子作りとキナコ作り）
12月 7日	収穫
12月18日	脱穀
1月22日	味噌造り（1）味噌玉作りまで
2月 7日	味噌造り（2）仕込みまで



写真3 畑作体験（大豆の脱穀作業）



写真4 加工体験（味噌玉作り）



写真5 収穫祭のようす（ずんだ作り）

加工体験では、枝豆を採取して、宮城県の郷土食である枝豆餡（ずんだ）を「ずんだ団子」に加工する作業を中心に据えた「収穫祭」を9月25日に開催した。この際、古川農業試験場より提供された大豆を使って、児童が自ら石臼で挽いたキナコ作りも併せて行い、多様な大豆加工の一端を体験する場とした。

もう一つの加工体験として味噌造りを行った。味噌造りでは宮城県北部、登米市で地場産品を使った加工品の製造販売を行っている米山加工クラブ「あぐり」より講師を招聘し、味噌玉を作って一旦干したもので醸造するなど、現在はなかなか見られない古い製法での味噌造りを体験した。

## 大学連携事業

東北学院大学民俗学ゼミナールとの連携事業として、大別して二つの事業を実施した。第一に、同ゼミとの共同調査の調査報告書の刊行と現地報告会の開催である。これは既に行われている大学生の調査実習とその報告書執筆に加えて、調査地における現地報告会を開催することで、調査の成果を現地の住民に周知するものである。報告書は3月21日に納品され、調査地への全戸配布の後、3月23日に報告会を開催し、参加は58名であった。

第二に、学生が交流会や畑作体験での体験補助に入るものである。これは学生にとって、自分たちが調査した事柄を応用し、博物館の体験活動としてどう活用できるかを知らしめるために企画したものである。

大学連携事業として大学生が関わった事業は以下の通りである。

- |        |               |
|--------|---------------|
| 11月 9日 | 交流会の体験補助      |
| 12月18日 | 大豆の脱穀作業の体験補助  |
| 1月22日  | 味噌造りの体験補助     |
| 3月22日  | 民俗調査報告書の現地配布  |
| 3月23日  | 民俗調査現地報告会での報告 |



写真6 現地報告会のようす



## (2) 地域との連携について

### 民俗調査を通じた地域との連携

地域との連携については大学連携事業を中心に、民俗調査を行った宮城県南三陸町戸倉地区との間に行った。

同地区との関わりは、民俗調査に伴うインタビューや参与観察を通して交流があったが、今回の事業を通して、博物館への来館や事業への参加などで、積極的に関わることとなった。

まず、小学校交流会に調査地が学区に含まれる南三陸町立戸倉小学校が参加した。この際、参加した児童のみならず、同行した父兄や養蚕体験事業の指導者たちと、調査者である博物館職員や大学生との調査以外での交流が図られた。

また、調査報告書の刊行後に現地説明会を開催した。これは、報告書が学術的なものであることから、地元の人が取っ付きにくいという面の解消と、報告書という性質上、あまり他地域との比較を記述していないため、民俗学的にどういう意味があったのかを補説することを目的に実施したものである。また、子どもたちも対象とすることで、次世代以降に、今回刊行した調査報告書の意義を伝えてもらおうという意図もあった。

以上の活動を通して、調査という形でたびたび訪問した我々が、単に調査地である現地から情報を得るだけではなく、こちらからも博物館の活動を通じた情報の提供を行うという形で、双方向的な関係を構築することができた。

## (3) 成果物について

### 博学連携事業化報告書

刊行部数 750部

本報告書は、本事業のうち、小学校を対象にした博学連携事業の報告書として作成した。ここには本事業支援対象外ではあるが、関連企画とした東北歴史博物館特別展「ちょっと昔の暮らし」に関わる事業報告も併せて行い、今後博物館の新たな活用法を提示することを目的とした。

構成は以下の通りである。

1. 博学連携事業の概要
2. 小学校交流会
3. 城南小学校との博学連携事業
4. 特別展「ちょっと昔の暮らし」

本報告書は、県内全小学校に配布し、次年度以降の当館事業の周知をはかることとした。



写真7 博学連携事業化報告書

## 民俗調査報告書「波伝谷の民俗―宮城県三陸沿岸の村落における暮らしの諸相―」

刊行部数 1000部

本報告書は、宮城県南三陸町戸倉地区波伝谷集落で実施した民俗調査の報告書である。内容は、概要以下、生業、衣食住、人生儀礼、年中行事、信仰等民俗全般にわたる。

配布は全国博物館・研究機関のほか、調査地に全戸配布すると共に、戸倉小学校や在籍児童にも配布した。特に戸倉小学校では、今後の「総合的な学習の時間」をはじめ、地域学習の場で、戸倉地区ならではの生活文化を活用するきっかけとして利用していただくことになっている。



写真8 民俗調査報告書

### （４）参加者の反応 交流会の反応

交流会に対しては、参加した児童のみならず、教員や父兄、指導者などからも高い評価を得た。以下『博学連携事業化報告書』に掲載した、事業化検討会の記録より参加各校担任よりの感想を抜粋して紹介する。

遠藤（城南小学校教員）：テーマが農業体験だったので参加できた。博物館の声がけに感謝している。城南小にとって交流会は博学連携事業の中間まとめのような位置付けで、自分たちのやってきたことを一度振り返り、今後の活動を見直すいい機会だった。城南小は畑も経験もなくゼロの状態から始めたので、活動を積み重ねてきた他校のような立派な発表とはいかず活動報告に留まった。当日は研究発表、体験教室、特別展の見学と日程が詰まっていて、私も児童も分刻みで動かなければならなかった。

奥平（深谷小学校教員）：毎年、3年生が稲作体験に取り組んでいるが、今年は交流会に向けて保護者等の協力を得、より入り込んで活動を進めてきた。他校のように博物館や大学生との事前交流はなかったが、当日は自分なりのめあてを持って臨んだ。昔の農具を使っの農作業体験は普段できない貴重な体験だったし、特別展では多くの農具とクイズの企画があつて集中することができた。また他校の子どもたちと心の面の交流もあり収穫だった。最後に、各校の研究発表に対して感想や意見を述べ合う時間があれば、新たな課題を見つけてさらに活動を進められたと思う。いい経験をさせてもらい感謝している。

鈴木（戸倉小学校教員）：本校では今年度、学芸会を学習発表会と名称変更したこともあり、4年生は総合的な学習の時間の発表として今回の交流会の内容を20分にまとめ上げるという計画を立てて取り組むこととした。子どもたちからは、「他校がやっている体験をやってみたい」「立派なステージで発表して緊張した」などの感想が聞かれた。当日は発表の準備に時間がかかり、また体験教室の子どもの動きが読めな



かったため十分な体験ができず残念だった。特別展は地元が取り上げられたので興味を持って見ることができ、帰校後に展示内容と関連する調べ学習をした子がいた。

また、体験補助に入った東北歴史博物館ボランティアの会および東北学院大学の学生の感想は次のようなものである。

#### ボランティアの感想

「研究発表からどの学校も十分に成果が出せたと思う」

「参加校が遠隔地から来ているので時間的に制約があったが、子どもたちにも自分たちにもよい機会だった。来年以降の開催も期待している」

#### 大学生の感想

「自分にもこのような機会があったらよかった」

「交流の時間や場面が少なかった。もっと時間をかけた交流になればよかったと思う」

#### 畑作体験での反応

畑作体験はほぼ1年間を通しての活動であり、参加した児童の側でも全体の感想として「博物館での勉強は大好きだ。いつも楽しみにしている」といった感想があった。

一例として、収穫祭に参加した児童の感想をあげると次のようなものがあった。

だんごをいっぱい食べました。

私は、だんごを作るときに、米粉、水をまぜパンのようにしました。だんごをまるめて、お湯の中「ポトン」といれ、うかんでいるのをすくい、つめたい水に、いれました。

そのあいだに、ずんだを作っていました。大豆をつぶしつぶし何回もつぶします。そしてついにできあがりしました。きなこ、ずんだの味があります。すごくおいしかったです。そのおだんごを私は九こも食べました。そしてお母さんとお父さんにもあげました。そしたら、とてもおいしかったといっていました。私もおいしかったです。

また、味噌造りの招聘講師からも次のような感想があった。

地元で味噌を造っているが、こうして小学生に作り方を教える経験は初めてだった。こういう機会があると、昔ながらの味噌造りを伝えていくことができるのでとてもよかったし、とても楽しい機会だった。

この事業は、4年生のクラスを対象に実施したが、事後の反応として、同校の教員のなかから、この事業を積極的に取り組もうという動きが生まれ、また親からも好意的な意見がでた。更に、体験事業の補助に入った父兄からも、「博物館ではこういう活動もやっているのですね。いつもやっているのですか？」といった質問がくるなど、博物館の活動を周知するきっかけともなった。

## 調査報告書および現地報告会での反応

民俗調査報告書および現地報告会では、地元の年配の人から、「自分が知っていると思っていたことでも、家によって違うことや、知らなかったことがたくさんあることがわかった。」といった感想があった。また、30代の人から、「自分はこういう地域のことには興味がなかったが、発表を聞いて、今後興味を持ったときに、絶対に聞けないようなことを記録にしてもらって感謝している。」といった感想もあり、単に現在の記録としてだけではなく、今後の地域の文化を保持する上での効果も認められた。

また、発表した学生にとっても、調査をしてきた内容が地元の人に好感を持ってとらえられたことを実感すると共に、報告会において各地の事例と比較することで、自分たちの調査データを再確認することができ、民俗学に対してより積極的に取り組もうと思ったという感想もあった。

### (5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

#### 城南小学校との連携について

城南小学校との1年を通しての活動は、土作り、播種から収穫、脱穀調整まで作物栽培を一から行うものであり、個別の作業を体験することに比して、より深い農業に対する理解を得ることができた。また農作業や加工体験では、博物館学芸員のみならず、外部講師や東北歴史博物館ボランティアの会、東北学院大学の学生との共同作業を通して、多世代間の交流がはかれるなど、単に技術を経験するだけではない体験事業を展開できた。

また、畑作体験では作物がどのように生育し、何に加工されるのかを体験するだけでなく、現在はなかなか見ることのできない民俗的な技術を体験させることにも力を入れてプログラムを作成したことで、博物館と連携することによってはじめて達成される体験活動とすることができた。

博物館側にとっても、長期間の継続的な体験事業ということで、単発の体験教室などでは実施できない深い事業実施となり、今後の体験事業への活用など、博物館運営の面で得難い経験となった。

#### 東北学院大学との連携について

大学との連携事業では、調査報告書の刊行や現地報告会の実施を通して、自らの調査データを地域社会に還元し直接現地の人からの反応を得られることができ、学生にとって貴重な経験を得ることができた。また、調査地の側でも、今回の事業を通して、調査者と被調査者の関係のみならず、児童の交流会への参加なども含めて多様な交流を得たことにより、調査そのものへの理解が進み、また博物館への認知度が上がるなどの効果を得た。

学生にとっては、調査をはじめとする民俗学的な成果を体験事業の補助として子どもたちが体験する姿に接することができるなど、通常の大学の講義や実習では経験することのできない活動に参加でき、民俗学の活用を実体験できたという面で得難い教育的効果が認められた。



### 小学校間の交流について

小学校交流会を通しての小学校間の交流は、日頃の学習活動の成果を発表する場にとどまらず、他校との活動内容の比較を通して自らの学習内容を相対化できるなど、参加した小学生にとっては、刺激的な学習機会となった。さらには、こうした場に各校の父兄をはじめとする地域の人々や体験補助として参加した東北歴史博物館ボランティアの会と東北学院大学の学生が参加したこともあり、小学生同士の交流に加えて、多様な人との交流もはかれる場となった。

また、同一県内とはいえ、これまで知らなかった地域の人たちを身近に感じるきっかけとなり、事後の学習として交流地域の地域事情を調べ学習の対象とするなど、交流会の場にとどまらない学習効果が認められた。

博物館にとっても、学習発表のみならず、体験活動の交流や展示を通しての交流によって、博物館という場の活用法を周知できるなど、今後の博物館の事業展開の一事例として、有益なものとなった。

# 博物館で、農、挑戦

07.11.15(29) 河北新報

染色・繭工作・脱穀



多賀城・城南、白石・深谷、南三陸・戸倉の3小交流

多賀城市の東北歴史博物館で九日、同市と白石市、南三陸町の三小学校の児童が農に関する体験学習を通じて交流した。文化庁の委託事業で同博物館が行う「博物館を核にした学校・地域交流プログラム」の一環で、児童は染色体験などを楽しんだ。

多賀城市城南小の四年生と白石市深谷小の三、四年生、南三陸町戸倉小の四年生の計約八十人が参加。博物館内の講堂で学校ごとに農をテーマにした体験学習の発表会をした後、繭のマスコット作りをする児童

## 学芸員「学ぶ楽しさ感じて」

スコット作りやペニバナを使った染色、脱穀作業などに挑戦した。

博物館のボランティア手作りのきな粉団子も振る舞われ、子どもたちは満足した様子。最後の感想発表でも、各学校の児童から「博物館での勉強は大好き。また来たい」「ほかの学校のみんなと交流できて楽しかった」との声が聞かれた。

博物館の小倉重介学芸員は「子どもたちはとてもいい表情だった。来年少以降も、博物館を活用して多くの児童に学ぶことの面白さを感じてもらえる取り組みを続けていきたい」と語った。

河北新報 平成19年11月15日 朝刊 29面

ひとこと

東北歴史博物館での3小学校交流事業に参加  
南三陸町戸倉小4年  
熊谷 玲奈さん(10)



### ◆しおりの染色体験◆

農に関する体験学習で多賀城市城南小と白石市深谷小のみんなと交流しました。きな粉の団子を食べたり、しおりの染色を体験したりして楽しかったです。

07.11.16(26) 河北新報

河北新報 平成19年11月16日 朝刊 26面

同様の新聞記事 河北新報 平成19年7月26日朝刊 26面



南三陸・波伝谷地区

# 農漁業が支え合い生活

## 東北歴史博物館 民俗調査の結果報告

東北歴史博物館(多賀城市)が東北学院大と連携し、南三陸町戸倉波伝谷地区で実施した民俗調査の結果報告がまとまった。調査は文化庁の芸術拠点形成事業に採択され、二〇〇五年度から三年にわたり行われた。東北学院大文学部歴史学科の学生、大学院生、OBら約七十人が参加。波伝谷地区の産業や年中行事などを聞き取りなどについて調べた。

### 東北学院大 学生奮闘 「住民の協力に感謝」

波伝谷の暮らしや産業について詳しい調査結果を報告する学生



報告書は①漁業の繁栄 ②衣食住③民間信仰④春祈禱(きとづ)⑤など十一年から成る。A4判、約二頁に及ぶ冊子で、何度も現地足を運んだ学生らの力作。協力した地域住民を交えての報告会が二十三日、波伝谷文化センターで開かれ、約五十人が参加。学生たちは「普通の漁村のように見えるが、実際は農業も高いウエーを占め、両方が支え合って生活が成り立っていることが分かった」「昔からの祭事や契約講などの組織がしっかり残っており、それを通して暮らしの中の人間関係が見えた」などと、調査で分

かった事例を紹介した。旧暦一月十五日を縁日

とする悪魔払いの祭り「春祈禱」がほぼ全戸が担い手となって行われ、波伝谷地区の暮らしに根差す重要な行事であることも確認された。

東北歴史博物館によると、民俗調査は学問的な研究だけでなく、住民とともに地域文化を掘り起こすという点に意義を置

いて実施した。波伝谷地区を選んだのは、近世の慣習の多くが受け継がれ、昔からの集落形態を把握しやすいなどの理由からという。

河北新報気仙沼版(リアスの風) 平成20年3月29日朝刊 3面

同様の記事

河北新報 平成20年4月6日朝刊 26面